

ふるさと(霞ヶ浦を中心とした周辺地域)の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと、風

第96号 (2014年5月)

風に吹かれて (74)

白井啓治

『皐月の空に篝火の去りゆく』

シクラメンのことを和名では篝火の花という。シクラメンというとクリスマススの花と思っている人が多いのではないかと思うが、あれは温室育ちのもので、実際には春の花である。

真綿色したシクラメンほど...という歌がヒットしてシクラメンというと白を連想してしまうが、シクラメンの花はもともとは燃えるような赤い花なのだそう。燃えるような赤なので、日本名では「篝火」とつけられたのだそう。

苺もクリスマススの季節にケーキを飾るものと勘違いしてしまいそうだが、露地物の苺は初夏から夏にかけての果実なのだが、今ではその時期に店先に並ぶことはない。家庭菜園するしかない。

「旬」を季節の走りの言葉のように思っている若い人達がいるが、旬とは盛り時の時をいう言葉である。言葉は時代と共にその使い方も意味も変わってくるものであるが、旬を初物のような意味につかわれるのは、言葉の崩壊としか言いようがない。

旬と言えば、今年も筍を大量に貰った。今掘ったものだからと持ってきてくれるのは有難いのだ

が、直ぐに下処理をしないと味が一気に落ちてしまうのが厄介である。それにえぐみも出て来てしまう。だが五本も貰ってしまったと、我が家にはそれを一度に下処理する鍋がない。嬉しく、有難いのであるが大変なことも事実である。

だが下処理を終えた筍と長芋を少し厚めの輪切りにして、バターを引いたフライパンに焼いて、出汁醤油をかけて少し焦がし目に仕上げ、山椒の葉を散らして食すと、春の幸せを感じる。筍のサクサクとした食感とわずかなエグ味、シヤキシヤキと口の中で音をたてる長芋のわずかな土臭さが春を存分に楽しませてくれる。

このところ内外問わず嫌なニュースばかりが目立つが、季節の味を褒めていると、いやな出来事がバカバカしく見えてくる。

嫌な出来事の殆んどが、利己的な我欲丸出しの話ばかりである。例えて言えば、この春の筍を独占して懐を肥やそう的な発想での問題ばかりなのである。筍を買占めても、掘って数時間もしないうちに下処理をしないと拙い食い物になってしまう、高値で買う者等いないだろうに...。だがそのことに気付こうともせず個人、集団、部族、地域、国とそれぞれに垣根をこさえて奪い合っているのだから情けないという他ない。人間なんて実に心貧しく可哀相な生物であろうかとおもってしまう。

ふるさと風の会会員募集中!!

会報「ふるさと風」も、お蔭様で今年9月には創刊100号を迎えます。ふるさと風の会では、「ふるさと(霞ヶ浦を中心とした周辺地域)の歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400
兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

ふるさと風の会 <http://www.furusato-kaze.com/>

小生、屁にもならない唯の傍観者ではあるが、自分自身の置かれている今という時の中から世の中を眺めていると、日本はいつた何処へ向かうとしているのだろうかと心配でたまらなくなる。日本は、何て大きく考えなくても、我が住む石岡市はいつた何処へ向かうとしているのか、一向に見えてこない。

文化力こそが明日の希望を創造するとは言っても、現時点で希望の構築できない原発再稼働へ走り出してみたり、希望を創造する最先端でなければならぬサイエンスの世界でも目先の利権主義に蝕まれている状態では「文化力」という言葉自体が空しくなってしまう。

文化力への求心的役割を果たさなければならぬ。マスコミの世界ですら、ただただ烏合の衆を扇動する事しかやっていないのだから、ここで「文化力」などと声を大に叫んでみても、やはり屁にもなりそうにない。

「小善」と「巨悪」

菅原茂美

「小善」とは、市井のあちこちに小さな親切がコロコロ転がっている状況と私は言いたい。大げさでなくて良い。優しい心遣いが、街の至る所に充ち溢れていれば大満足だ。大慈善事業に拘らなくてもよい。温水プールや保養施設とか、大規模なスポーツ施設など、財政窮乏の地方自治体が、競って整備すべき物とは思えない。選挙目当てなら一層不見識だ。国も地方自治体も、そんな積み重ねが膨らんで、今日のような借金大国に転じてしまった。豪華な宴は要らない。小さな幸せで、十分。そして、戦争のような「巨悪」がなければ、この世はバン万歳。

*

人間は、本来、自己責任で生きていくべきもの。

基本的には人に頼らず、己の器量で生きていくべきもの。学校教育のうち道徳などは、家庭において親がしっかりと手本を示し『人に迷惑をかける人間にだけはなるな!』この一点だけに絞って、全ての親は我が子を育てるべきだ。治安のよい平和国家は、まずもって親の家庭教育に基礎をおくべきと固く信じる。

日本で大震災後、店から物を略奪する例は殆どなかった事は、世界中から称賛された。又、外国人が日本の田舎などを散策すると、道沿いに果物や野菜などを並べ、無人販売している。『日本には泥棒がいないのかしら!』と、しばし驚かされるという。こういう事は、日本が長年かけて培ってきた、家庭教育の賜物であり、日本が世界に誇れる美德だ。海難事故の際、船長は全員避難の後、最後に退避する。こんな常識だ。何もかも、教育は学校任せでは、親の責任を果たしていない。しかし、自立・自己責任といっても、身障者や身寄りのない高齢者、会社倒産で身の振り場所がない人や、離婚や死別で片親の家庭などは、社会が手厚く保護してやるべきである。しかし、現在、生活保護費受給者が日本総人口の1%とは異常といえる。本当にやむを得ない事例は仕方ないが、働けるのに職種選んで働かず、保護費でこのうと暮らしているのは、著しく社会道義に反する。安い時給で、懸命に働いている人が多数いるのだから、そのような不均衡は早急に是正すべきである。自立心の涵養こそ最重要で、何もかにも国が面倒を見るやり方は、国家の疲弊・衰退に通じる。

*

さて、「巨悪」とは何か?

その最たるものは、「戦争」である。国の舵取り役が傲慢なら、近隣の弱小国を侵略し、権力の及ぶ範囲を拡大していく。歴史上、世界の至る所で幾度も見られた現象である。

日本の戦国時代、配下の武将や兵卒の命など、まるで消耗品扱い。武力で制圧し、領土を拡張していった事例は、人命の尊さなど、微塵も感じられない。そして第二次世界大戦においても、兵卒をまるで、使い捨ての消耗品扱い。誰がどんな理屈を述べようが筋の通った話ではない。国家にどんな遠大な野望があるにしろ、人命を虫けらのように扱ってよい理由など、どこにもあるはずがない。戦争は正に、「巨悪」である。

洋の東西に関係なく、至る所で攻め取り合戦は繰り返された。中国では、幾多の王国が興亡。しかも何千年にも渡り、国盗り合戦は繰り返され、その影響は、朝鮮半島や日本列島にまで及んだ。特に、「二元寇(げんこう)」即ち蒙古襲来は幸いに二度(1274年・81年)とも大風により失敗。もしあの時、10万もの蒙古軍に占領されていたなら、今日の日本はどうなっていた事やら…。西洋人の南北米大陸や豪州、そしてアジアを侵略した歴史も極悪非道であった。スペインのピサロは、わずか180人の兵隊で1532年、インカ帝国を滅ぼし、財宝や領土を奪った。戦法は、陰謀をめぐらし、インカの部族同士を対立・戦わせて最後は、その勝った者を騙し討ちで滅ぼす。超省エネの戦略であったという。

マヤ文明は、ロンブス以前に衰退したが、白人どもは、マヤの遺跡を破壊し、財宝などを持ち去った。遺跡には、第〇〇代大王の彫像は大英博

博物館に：などと書かれている。こうしてみると、世界に名だたる博物館は、多くの文明を荒らしまわって集めた、いわば「盗品展示場」なのか。

白人どもは南北米大陸の先住民9千万人の9割を殺害したという。毛布に病原菌をしみこませ、インディアンにプレゼントし、ヨーロッパの伝染病を蔓延させたり、米大陸に馬はいなかったのに、船で運んだ馬を乗り回し、銃乱射でインディアンを皆殺しにしたり、筆舌に尽くせぬ暴虐を働いた。紙幅の関係で詳細は省くが、インディアン絶滅政策における「セミノール戦争」など、徹底した殲滅作戦は、残酷この上もなく、アメリカの歴史上、大きな汚点である。

*

【ユートピア創建は夢か？】

人類は、いかほど大脳を膨らまして、いまだに、永遠の夢であるユートピアの創建に、到達できずにいる。平安後期、奥州平泉の藤原3代は、「浄土」を目指し、理想郷を創建中であったが、百年そこそこで頼朝の攻略により、破壊された。そして、実篤の「新しき村」は、調和的な共同体の実現を目指し、理想に燃えて活動したが、大規模・永続化はしなかった。

世界中には、ユートピアに近い国家を建設した国もあったかも知れないが、天然資源に恵まれるなど、よほどの財力基盤がなければ、国民が負担しきれず、「理想郷」創建は、なかなかできなかったのかもしれない。小規模なら多少は実現した。

なぜ大規模で永続するものがないのか？ 私が思うには、小規模の組織なら、大方の人間

は善良である。個人個人はつましやかで、とても親切である。家族単位や数人の仲間同士なら、互いに助け合い、人の痛みを理解し、己を多少犠牲にしても、仲間のために懸命に努力する。

勿論小規模集団なら、何でもまとまりの良い、善意の社会活動ができるとばかりは言えない。窃盗団やテロリストなど、小規模で統制のとれた集団が、想像を絶する悪事を重ねる事例も時に存在する。40年ほど前の連合赤軍による「浅間山荘事件」など、記憶に生々しい。オーム真理教事件も、訳の分らない教義に、知識階級までもが洗脳され、妄想に突っ走る稀有の事件であった。

又、小集団とは言えない、単独犯もいろいろあった。スパイ行為で、母国を敵側に売る卑怯な手法。或いは、会社の根幹をなす機密を、他社に漏洩し、多額の報酬を得る。これらは、オレさえよければ後はどうなろうと構わない。許し難い反社会的行動である。いずれにしても、小集団はまとまりがよく、社会に貢献しやすい敏捷さもある。

反面小集団であるが故に秘密が保持され、反復して犯罪行為が行われる例も確かにある。

しかし組織の規模が大きくなると、威信をかけて：とか、あの国にだけは負けられない：など、エスカレートし、收拾がつかなくなり、ついには最悪の戦争にまで発展する。国家の梃を取る執行部が非常識なら、穏健派等は消極的な臆病者扱いされる。結局、声の大きい者に支配され、取り返しのつかない極限状態に突き進む。かつての日本の世界大戦突入など、そのよい例である。

どうして、こんな事になるのであろうか？ 組織も国家単位ほどに規模が大きくなると、人類は、善良な精神をかなぐり捨て、巨悪に向かっ

て驀進する。勢力を拡大し、国家として勢いがつくと、留まるところを知らず、より巨大になろうとする。侵略を重ねては、ますます巨大化する。モンゴル帝国をはじめ、世界に〇〇帝国と呼ばれた巨大な国家は多数存在した。勝った方は、己を正当化し、正義を貫いたような物言いをするが、負けた方は、蛮族と罵られ、生命財産を奪われ、散々な目にあう。

日本でも大和朝廷とやらが、東北地方の先住民を、蝦夷（えみし）と罵り、これを平定した：などと、歴史書には書かれている。そしてアイヌ民族を人間扱いしない極悪の政治を行った。冷静に分析してみれば、日本列島の先住民である縄文人を、大陸の戦争難民である弥生人が大挙して押し寄せてきて、蹂躪放題。いわば流れ着いた他国で「敗者復活戦」のように勢力争いをし、先住民を虐げた。先住民から見れば大和朝廷などというのは、どこの馬の骨とも知れない存在。新たに流れ着いた、ただの侵略者にすぎない。

現在の日本人の大方は、バイカル湖付近に源を持つDNAを強く引き継いでいる。人類とともに移動した犬・猫・虱・蚊・稗・粟なども、バイカル湖付近のDNAと近似である。いわば日中韓朝みな同じ流れをくむ者同士。何を今更、悪口を言い合ひ、いがみ合っているのか。肚（はら）の小さな小物同士のケンカとしか見えない。

特に中国は、16億人とも言われる大人口を抱えているのだから、当然、数のうちには大人物がいてもよさそうなもの。孔・孟の生まれ変わりのような、大人物が出現して、大局観に基づく国際正義にかなった政治がなせ行われぬのか。ノーベル平和賞は犯罪人を表彰するのだから、ナンセン

ス：などと時代錯誤も甚だしい。防空識別圏とやら姑息な手段で、他国に圧力をかけ、領土拡大を狙う。尖閣の次は尻理屈を述べ、琉球列島は元々中国のもの：とか言いだすに違いない。古の○○帝国を、夢見ているのであろうか。愚か者の無謀な夢は、国際社会が早急に対処すべきだ。

＊

【原爆開発・投下に関する詳報】

…ある新聞の「終戦特集」から抜粋：

私に言わせれば、人類史上世界最大の「悪事」は、原爆投下である。1945年4月に米国大統領ルーズベルトが死亡し、それを引き継いだトルーマンは、2月のヤルタ協定どおり、スターリンに極東における領土・権益の要求を認める代わりに、対日参戦を促していた。ところが7月16日、米国ニューメキシコ州の砂漠で原爆実験が成功するや、これを使えば、ソ連の参戦を得なくとも、対日戦争は終結できるとの判断から、トルーマンは、7月25日、できるだけ早く原爆を投下するよう命じたという。チャーチルもこれに同意した。こうして、8月6日、B29「エラノ・ゲイ」により、広島に世界初の原爆投下がなされた。

スターリンはスパイ活動で、ニューメキシコ砂漠での実験成功を素早くつかんでいた。8月下旬の日本への参戦予定を、アメリカを自由にさせてはいけなないと判断。8月9日第2発目が長崎に投下される直前、満洲に駆け込みで雪崩れ込んだ。

「日ソ中立条約」があるので、日本には中立の素振り最後まで見せ、安心させておいて、着々と攻撃準備を進めていたが、突然、一方的に条約を

破棄。満洲攻撃は関東軍総司令部のあった新京に向かつて西・北・東3方向から一斉に攻撃し、70万の関東軍は主力を南方方面に抽出され、満蒙開拓団などが主の民兵で、弾薬なども不足し、たちまち撃破された。155万人の在留邦人のうち、7万2千人は殺害されたり自決。捕虜にされた日本兵はシベリアに抑留され、重労働の上、栄養失調と極寒で、多数の死者を出した。愛新覚羅一族は皇帝退位、満洲国は13年5カ月で滅亡した。

8月15日の昭和天皇玉音放送後、米軍は停戦したが、極東ソ連軍は16〜20日で樺太制圧。一方千島列島は18日から進軍してきて、日本軍は玉音放送後、武装解除していたので、たちまち占領された。スターリンはトルーマンに対し、占領地域を、樺太と千島列島の全て。更に北海道の北半分（釧路と留萌を結ぶ線以北）を強く要求。これに対し、トルーマンは18日、千島列島は認めるが北海道の分割は拒否。そこで樺太から進軍したソ連軍は、北海道本土を諦め、28日、択捉島に上陸。9月1日国後・色丹両島、3日歯舞と北方4島全てを支配下に置いた。北方4島にいた1万7千人の日本人は、半数近くが夜間、漁船などで脱出したが、転覆などで多数の死者行方不明者を出した。北海道庁は「未だ領土関係は正式決定を見ず」として留まるよう要請した。残った日本人島民は、約2年間ソ連人と混住。47〜49年に強制送還された。なお、千島・北方4島の日本人は、日ソ中立条約があるのだから、攻めてきたのは米軍だと最後まで信じていたという。

トルーマンは、原爆使用の理由を「真珠湾の報復と米軍のこれ以上の犠牲を防ぐため、早期終戦を狙った」と回顧録に示した。しかし、原爆開発

に携わった科学者と、後に大統領になるアイゼンハワーは原爆投下に反対であったという。

ソ連は49年、原爆実験に初成功。以来、米ソの核競争は激化し、冷戦が続く。

米国が原爆開発に着手したのは、日米開戦2か月前、41年10月。計画にインシュタインも署名。42年物理学者オッペンハイマーの指揮で開発着手。これがマンハッタン計画である。44年3月ロスアラモス研究所で濃縮ウランの抽出に成功。前記45年7月16日に爆発実験成功。

ヒトラーも原爆開発に関心はあったが、着手には至らなかった。英米はドイツへの原爆投下計画を破棄。残りは、秘かに原爆製造計画のある日本だけとなった。

事実、日本でも原爆開発研究は進められていた。陸軍は理化学研究所に基礎研究を依頼。仁科芳雄はこれを引受け、熱拡散分離塔を東京・駒込に設置。ウラン濃縮に着手したが、未完のまま終戦。海軍も湯川秀樹のいる京大に遠心分離法を依頼。研究費も少なく、これも中途挫折。

1996年、国際司法裁判所は、国連総会の求めに応じ『核兵器の使用または威嚇は、武力紛争に適用される国際法の諸規則、特に国際人道法の原則と規則に、一般的に違反する』との判決を下している。

【原爆どころか、もっと恐ろしいのは「環境汚染だ」という話もある。DDT・PCB・ダイオキシン・環境ホルモンなどは、全生物の存亡に関わる次元の異なる凶器だ。人類の知能は、どこまで信用できるのか？DDTを発見したミュラーは1948年ノーベル賞を受賞している。確かにジャガイモの害虫を殺し、マラリア媒介の蚊を殺

したが、今なお分解されずに残り、自然環境を著しく破壊している事を忘れてはいけない。】

*

人間は、個々人は大方「善良」である。組織も小規模なら、一部例外を除き、大方善良である。

しかし、組織が巨大になってくると、面子や威信にかけて、「巨悪」に進む。近隣の弱小国など、すぐ手に入れようと横暴を極める。そして戦いに勝てば、己を正当化し、敗者を、いつかは我が方を狙う危険分子と決めつけ、理由を正当化して、侵略にかかる。歴史上よく見られた現象である。

ユートピアは、誰もが望む理想郷。しかし人類は、いくら大脳を膨らまして、なかなかそれを実現できない。小さな親切が充ち溢れる街こそ理想郷。これを拡大していけば、自ずとユートピアへの道は開かれるであろう。住民の心がけ次第で、明るい住みよい街は実現可能である。愚かな軍備拡張競争を排し、世界平和のために、全ての人類は、まず「小さな親切」から始まり、未来の子孫に、喧嘩れない世界を構築すべきである。

霞ヶ浦水運 (三)

木村 進

前回まで高浜ルートと関宿から江戸川に入ったことや途中のショウト・パス陸路と運河・水門などについて書いてきた。今回は水戸からのルートについて述べたいと思う。

四、那珂湊内海まわり

霞ヶ浦の水運を調べると、高浜から運ばれたものは米、清酒、醤油それに材木、炭などであり、特に米は高浜相場なるものまであり価格がここで決められたこともあったという。また土浦からも同じように醤油などを中心に運ばれていた。ただ江戸時代の醤油醸造所では石岡地区は土浦などよりも多くの生産量があり、高浜から石岡は多くの煙突が建っていた。しかし江戸の醤油は土浦の歴史を見てみると常陸の高級醤油として定着していたようだが、石岡(常陸府中Ⅱ常府)の醤油の販売ルートは江戸よりも水戸(徳川藩)に向かっていたようである。これにはさまざまな理由が考えられるが、そちらの話は置いておき、水戸への運搬ルートも発達していたはずである。

陸路だと馬の背に乗せて(米なら左右に2俵)馬子が一人必要(これが駄賃の言葉を生んだ)だが、船なら高瀬船で船頭1人に人足を数人入れても何十倍も一度に運べた。このため馬で運ぶ駄賃の1/5~1/10へぐぐで済んだという。

このためには霞ヶ浦水運として、土浦・高浜からの水運とは別なルートがどのような状況であったのかを知らなければなりません。

そこで、北浦を航行していた船がどのようなルートで物資を運んでいたのかを調べてみました。これは那珂湊内海ルートと呼ばれていたもので、仙台や石巻など東北方面から外洋を船で運び、那珂湊からそのまま川をたどって涸沼に入ります。また水戸からも那珂川から涸沼に入ります。この那珂川と涸沼は大昔一体になった大きな内海(汽水湖)があり、阿多可奈湖(あたかなこ)があったといわれており那珂川・涸沼はつながっている

のです。

涸沼を船で運び、そこで荷下ろしをして、こんどは陸路を「銚田」または「小川」へ運びます。銚田からは北浦を通って佐原から利根川を遡ります。小川からは、前に述べた高浜ルートと同じです。何故小川に荷を運んだのかというと小川・玉里は水戸藩との関係が深く、荷物運搬のルートとして適していたと考えられます。これは御留川(おとめがわ)制度とも関係が有り、また少し後で紹介します。

前にも書きましたが、日本の東側を流れる海流は親潮が北から南へ、黒潮が南から北へ大きく流れており、銚子沖で二つの海流は外へ(東へ)大きな流れを形成しています。

力の弱い船では外洋を航行するとこの流れが影響し事故が多く大変危険だったようです。このため面倒でも一度陸揚げして陸路を霞ヶ浦まで運ばなければならなかったのです。

先日銚子に行ってきましたが、国木田独歩の父親専八も旧龍野(兵庫県たつの市)藩士であったが、銚子沖で船が難破して銚子に逗留し、知り合った娘と結婚して独歩が産まれています。こういう話もきつとどこかで関係しているように思います。

さて、涸沼から陸路を使うために、荷物を乗せ換える手間などが発生しますので、外洋ルートの発達や鉄道などの発達で次第に廃れて行ったようです。

北浦には蒸気船が明治21年に就航します。鉄道は石岡〜小川(玉造間に「鹿島参宮鉄道」(その後の鹿島鉄道、現在廃線)ができたのは大正11年です。鉄道の普及で物資も鉄道で運べば時間が1/10くらいになるのですから、やはりどうして

も廃れてしまうのは仕方がないことでしょう。

五、霞ヶ浦四十八津と御留川

「霞ヶ浦四十八津」という霞ヶ浦の周りの漁師たちで作る自治組織のようなものが、江戸時代になる前からあったといえます。津というのは船着場のある場所（湊）を指します。

江戸時代の初め（1665年（寛永2））に、下玉里村の大地主が自分の有している土地の前に広がる高浜入を水戸藩が占有できる「御留川（おとめがわ）」とするように申し入れが行われました。そして水戸藩もこの霞ヶ浦の豊富な魚資源を容易に手にすることが出来ることになるため、この申し入れが受け入れられました。

実は、この下玉里村の対岸は「井関」で、昔は徳川水戸藩領だったのです。御留川というのは川においては兩岸を保有している場合にその間にある川の漁業権がその土地の所有者（主には藩）のものになる仕組みです。山においても御留林制度が各地で行われています。

従って、高浜の入り江の入口部分の漁業権が今までそこで漁をしていた漁師になく、その大地主から雇われた漁民が大網で大量に魚をとる事態になってしまいました。

これに反対していた「霞ヶ浦四十八津」の漁師たちは大いに驚き怒ったのです。

しかし、いくら反対しても水戸藩が認めてしまえば従うしかなく、この「御留川」以外での漁を皆で相談しながら行っていきました。48箇所（湊）の漁師たちが毎年集まって会議をし、霞ヶ浦の豊富な魚を乱獲から防ぎ、自分たちの子孫にまで霞ヶ浦の豊かな自然をまもるため、大量の捕獲法を

認めず罰則も設けた八カ条を制定し、江戸末期まで続けてきたといわれています。この霞ヶ浦の御留川制度は日本の御留川の代表的なものです。良い面もたくさんあるのですが、漁ができなくなりその土地を離れていった人たちもいるようです。物事には良い面も悪い面もありますので、私はいろいろな地を訪れたときに出来るだけこの両面を見たいと思っています。すると自然に周りの光や風がささやきかけてくれることもあるように思います。

玉里の名前も常陸風土記などにも見られ、ヤマトタケル伝説が残る地であり、版画家滝平二郎さんの生まれ育った場所でもあります。この玉里地区に「西の宮（恵比寿）神社」という小さな神社があり御留川の説明看板があります。

六、江戸川から江戸へ

江戸時代には高浜には近隣から多くの荷が集められました。江戸時代の初めにすでに府中領の年貢米を江戸に船で運んでいた記録があるといえます。そして江戸中期以降になると河岸問屋の数も増えてきました。

高浜入りでは、高浜以外にも石川河岸、高崎河岸（玉里）に問屋があり、にぎわったといえます。もちろんこのほか、土浦や銚田の方にもいろいろな水運が発達しています。

さて、先日で利根川から関宿（せきやど）まで川を遡って、江戸川に入り江戸へ運んでいたことを書きましたが、この江戸川から江戸の中心部への流れを少し書いてみたいと思います。

船は旧江戸川を下り、千葉県の行徳の先から現在の新川へ入ります。そして船堀で中川に合流し、

そこから小名木川を通って江戸の中心部を流れている隅田川へ物資を運んでいました。

新川は江戸時代には三代将軍家光の時代はかなり整備され、掘削が進められた人口の水路で、もともとは船堀川があったものを拡張、新たに船運のために掘削したものです。

そのため、江戸時代は船堀川とか行徳川と呼ばれ、江戸水運の大動脈になったそうです。これは行徳の塩田でとれる塩を江戸に運ぶためでもあり、この新川沿いにさまざまな問屋などができて賑やかであったといえます。小さくも船が行き交うこの辺りは歌川広重の版画などにも残されていて昔をしのぶことが出来ます。現在は、川沿いに桜の木を約千本植え、木橋や石の護岸整備などをして昔の風情を取り戻す整備が行なわれています。

さて、この小名木川は江戸の今の箱崎あたりまで続いています。ここに「清澄庭園（東側）、清澄公園（西側）」があります。この場所はかつて豪商「紀伊國屋文左衛門」の屋敷があったところといわれ、明治になって三菱の創始者「岩崎弥太郎」がここを買い取り庭園として整備した場所です。その後、関東大震災で避難所として活躍したため、東側の庭園部分を東京都に寄贈し、昭和48年になって残りの西半分を都が買い取って公園にしました。

また隅田川と小名木川の合流点近くに芭蕉の「芭蕉庵」がありました。現在は「芭蕉記念館、芭蕉稲荷神社」になっています。

芭蕉が奥の細道への旅立ちは元禄2年3月27日で、その前にこの芭蕉庵を引き払い、「清澄庭園」のすぐ南側（深川）の「採茶庵」へ越しており、ここからの出発となりました。

・草の戸も 住み替はる代ぞ 雛の家

さて、3月27日に旅立ちますが、ルートは船で隅田川を千住まで行き、千住宿から日光街道を進みました。千住で詠んだ歌が

・行く春や 鳥啼（なき）魚の目は泪

やはり、当時に風景が浮かんで来ますね。

しかし、芭蕉は霞ヶ浦へのルートではなく千住から日光への道をとりました。では、まだこちらの水運が発達していなかったのかというとそうではありません。

元禄2年にはすでに、小名木川から新川（船堀川）を通り、利根川へのルートは完成しており、その50年程前に、日本橋小網町から本行徳まで貨物（客）船「行徳船」が就航しています。当時はすでに50隻以上の船が往来していたといえます。行徳船を調べてみると、江戸後期には朝6時から夜6時まで江戸と行徳間をたくさん船が往復しており、船頭1人に24人の客を乗せることができましたといえます。

また、行徳の塩田の塩や野菜魚介類を江戸に運び、江戸からは日用品や成田などへの参拝客を運んでいたようです。

明治になりしばらくしてから蒸気船が東京と銚子間に就航します。これは内外通運会社の「通運丸」や「利根川丸」で、1日2往復で18時間（1泊2日）でした。

内外通運会社は後の日本通運であり、民営化されたのは昭和25年でした。

しかし鉄道が開通すると、18時間→2時間

となったため、船は急速にその役割を減らしてしまつたのです。

また、行徳（市川市）の塩田は江戸の初期には家康の保護もあり、江戸には無くてはならない塩の一大供給地域でした。しかし、中期以降には赤穂などの良質の塩が供給され始め、製法が天日干しによる比較的小さな業者が多かつたこともあり、天候にも左右され一時の四分の一以下に減つてしまつたようです。

行徳の船着き場は本行徳村にあり、現在「常夜燈」がある辺りではないかと思えます。

山桜

伊東弓子

私には大好きな道が一つある。そこは古道だ。私は或る目的を持って或る思いをもってその道を通る。長い時間の中で沢山の人が、目的に向つて、思いを抱えてこの道を通り過ぎて行つたことだろう。その姿や思いや足跡を感じながら通るのも楽しみの一つだ。

夏の強い陽射しを避けて木々の茂るこの道は、どんなにか安らぎを与えてくれたことか。隣り村へ行く人、府中の市に向かう人、大枝の津の急ぐ人々、ガギ坂の飲み屋で飲み潰れ朝帰りの男、さまざまの姿や声が聞えるようだ。森から浜まで紅葉する頃には、冬に備えて男達も女や子供も走り回つたことだろう。魚や貝、木の実を拾つた縄文人、弥生人も豊かな恵みを喜び合つたろう。

取り入れも済むと百姓達が集められる。谷津の畔で見送る家族の姿、木枯しが容赦なく吹く。世

は戦国時代、地方での勢力争いも凄まじいものだ。この道の奥には館山館がある。ときの声上がる。向う場の高台に狼煙が見える。屍の山も出来たろう。

明るいつ陽に包まれ凍っていたものが溶け始める。芽吹きと共に鶯が谷渡りし始める。草が出、花が咲く。そんな中で十一と二才位の女の子が飛び跳ねている姿が見えた。自然界の春の中で、この子は人生の春を迎えようとしている。私は追つていった。そこには三百年は経つたと思われる大きな山桜の木があった。あの子はいなかったが花盛りの木は見事だった。

ギター文化館

2014 CONCERT SERIES

- | | | | |
|----|-----|------------------|------------|
| 5月 | 5日 | 藤井敬吾 & 北口功 & 角圭司 | 名器コンサート |
| 5月 | 24日 | マリオ鈴木 | ギターリサイタル |
| 6月 | 1日 | 國松竜次 | ギターリサイタル |
| 6月 | 8日 | 高橋竹董 | 津軽三味線コンサート |
| 7月 | 7日 | 荘村清志 | ギターリサイタル |

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35
Tel0299-46-2457 Fax0299-46-2628

所が七年前、花半ばにしてこの木は、人の手で倒されてしまった。数日後、幹は勿論、根も掘り起こされてすべて姿を消した。無残に折れた笹に花びらがついていた。この山桜も三百年前は細い枝で花は一つ二つ咲き始めた頃だったろう。咲いた花が散ることはなく命を絶たれた山桜の昔、昔を創造してみたい。

ひなは祖父母と三人暮らした。両親は漁に出て亡くなってから十年になる。寺の世話人をしてる祖父は荷車を引いて今朝早く出かけた。祖母は人の出入りがあるので、代わりにひなが手伝いに行くことになった。ガギ坂を登ってくると緩い曲がり角がある。そこに細い山桜の木があることを知っていた。

「早く大きくなって一杯花をつけてね」と数少ない一輪一輪に言葉をかけて、見まい聞かまいの稲荷、小松館、小松殿の墓、谷津田に出て坂を登ると寺の門前だった。生垣に沿って庫裏に行く道がある。境内では屋根から下ろした茅を荷車に積んでいるようだった。

爺ちゃんいるかな、と思った瞬間、怒鳴り声が出た。「道具を跨ぐな。これで二度目だ。確り覚えろ」

何だろう、覗いてはいけない、と思いつながらもそっと小枝をかき分けてみた。ひなと同じ位の男の子が項垂れている。見なければよかったと急いで勝手場に行つて挨拶をした。

「高崎村のおふじさんの孫か。よく来てくれたな」

婆ちゃんから預かった魚を渡して手伝いを始めた。世話人達は荷車に茅を積んで村々に戻つて行った。野良仕事は忙しくなる前に終わる様に総手

の仕事だった。皆天気が続くの願っている。ひなは火守りと水汲みで忙しかった。水汲みは藪を通つて井戸の下まで行くことになる。木々が暗い、何回行つても気持ちの良い所ではないが井戸端まで行くとホットする。その一角が明るいからだった。あの子がいた。気配を感じてか慌てるように顔を洗つていた。静かな森の一隅で何も話せず水を汲んだ。話しかけてはいけないような気がしたからだ。桶を持って行く姿が大分重そうだ。ひなの桶も重かった。坂を登るのは辛い。一休みしている桶を振り回しながら男の子が来た。ひなと目が合うと慌てて止めた。「重いか」と声をかけて返事をしない中に桶を坂の上まで運んでくれた。何度も行き往して水瓶は一杯になった。その子と合つたのは一度だけだったが、その日は始めての手伝い日にもかかわらず手も足も軽かった。

ひなはまた寺へ行って手伝いたいと思つたが婆ちゃんがせつせと出かけて行く。ひながその子と初めて会つた春は流れるように過ぎ、少しばかりの田畑でも三人で息つく暇もない程の忙しさが過ぎた。

お盆になつたらやつと休みが出来て、手伝いに行くことになった。背負い籠は小さいが野菜が入ると思ひ。でも胸は踊り足は軽かった。あの山桜の葉も逞しい深緑の色で揺れていた。

「早く大きくなって大きな木影を作つてね」と葉を撫でながら通つて行つた。大工さん達は半分故郷に帰り数は少なかったが、飲物、食物作りの勝手場は大賑わいだった。井戸の回りは草も刈られきれいになつていたが蚊の多いのに驚いた。細い道は北の方に続いている。何処へ続くのか、谷津田もある。「水汲みか」あの子がやつて来た。「そ

うだよ」分かつていても話の切つ掛けつくる言葉を交わしていた。「盆は帰んなかったの」「盆と正月半分づつ帰るんだけど、俺はペーペーだから帰れっかどうかな」少し話が出来て親近感を増した。庫裏に安置されているご本尊さまや歴代人さまをお参りして寺を後にした。二言三言話したことだ。胸が熱くなるおもいだつた。夕食時は話しが一杯あるような気がして始まつたが、結局大工さんが交代で帰ること、木組みの取り外しが大分進んで、使える物、使えない物が分けられていたことに留まつた。

やぶ入りの日二人は寺へ出かけて行つた。ひなは何か不満で家のことも手につかず、父ちゃん母ちゃんもあの世に帰つてしまつたし、彼此、まぜこぜになつて涙が止まらなかつた。灯もつけず泣き寝入りしていた。夜は爺ちゃん婆ちゃんが寺であつたことを話してくれた。その中に、「お前と同じ位の大工の卵がいた。行く行くは棟梁になると意気込んでいた。ひなも何か夢をもてよ」

という。ひなは毎日でも寺へ行って手伝いたいそれが願いだと返した。爺ちゃんは笑いもせず怒りもせず「うん」と一言いっただけだった。特別のこともなく家のことに追われていた。

取り入れ前に取り外した木材類を分配するので爺ちゃんが出かけた後、ひなも家を出た。秋の陽が色づいた山桜の葉を、一層彩やかにしていた。

「早く大きくなって大地の肥やしになつてね」と一枚一枚眺めた。背負籠の芋、山栗、木の子は重い、気は急ぐが肩に食い込む。

本堂は姿を消し更地になつていた。賽銭らしい銭が土の上から出てきた。大部昔の銭もあつたと

住職さんが皆に見せていた。各村の総代、世話人さんが手にして見ていたが、話しが変わった。作業が順調に進んでよいが、同時に手伝いが多い事、寄付の不満もある事など話しが続いた。仲立ちする人の苦勞話し、住職さんが大声をあげてしまった失敗談も語られていた。

「私もまだまだ修行が足りませんな」

と苦笑いをしている。

「それは仕方がない。この寺は雷さんを背負っているんだからね」

皆で大声で笑っていた。ひなは大人の人も苦勞あるんだなと思いつつ、釜処の番をしたり、急須を運んだりしていた。その一方で嬉しい話もあるのだと、総代さんが話し出した。

「某家のお婆さんが長寿の祝いに“寄付を…”

「某家の老夫婦が二人で還暦を迎えられたお礼をしたい…」

「上の子が二人亡くなった悲しみの後、今年産まれた児の成長を祈願したい…」

それぞれ板木に書いて本堂の柱に埋め込むということだ。今度は住職さんが、

「有難いことだね。更地になった本堂の下には、古代人の住んでいた跡があることが分かったようです、ここは古くから人が住み歴史を刻んできた所なので、今度出来る寺は三百年位は長持ちするといいいですな、その頃はどんな世の中になっていることやら…」

「産れ変わって見てみたいもんだ」

「お経の中にある話しが本当になるかね。家の壁が光るようになるとか、座ったまま世界中いや十万億土の果てまでも知ることが出来るようになっていくかも知れないね」

「いや、いやいや、いや」

と遠い遠い先の時代に思いを寄せ、出来上がるまでお互い元気でいたいもんだと話しが終り近くなった。あの子はいそうにもなかった。

古材を村々に持ち帰る荷車が動き出した。

住職さんは、

「長いこと寺を支えてくれた木材です。どうぞお檀家のお役に立ててください」

と見送っていた。陽が傾かない中に明日のための水汲みや焚き付けになる小枝や木の葉を集めに行った。

「小さな籠だな。俺なんかこんなにつかい籠なんだ」

と冷やかす声があった。あの子だった。一杯押し込んで二人で帰っていった。後ろ髪を引かれる思いだけれど、暗くならない中に帰らなければならぬ。坂を登った所で暮れ六つの鐘が鳴った。今日一日で沢山のことを知ったことが喜びだった。取り入れは矢継ぎ早に仕事があつて、何を考える暇もなく疲れて眠るだけだった。

十月（今の十一月）には、夷神社の十月綱おろしの神事が行われる夜、大工さん一行が総代さんの家に招かれてきた。大工さん達の故郷は山国だから、川辺の催しは珍しかったようで大喜びだった。里の話に花が咲き秋の夜長の深くていくのも忘れている賑わいだっただけだ。

正月休みに帰ったあの子は、寺に戻ることはなかった。この一年足らずの出合はひなの心に甘酸っぱい思い出として残っていた。

二十年余りの歳月をかけて寺は出来上がった。時は元禄年間だった。元禄の文化の花盛り、寺も隆盛を誇った時だった。（波阿無駄佛）の石塔は境

内の南側に当時の人の名を残し佇んでいる。

この地は青春の日の故郷だと言って、孫を連れて川を訪れてくれたその人とは、積もる話沢山あった。当時の人は極極少なくなったがあつた山桜は健在だから、寺へ行く道として案内することにした。ガギ坂から山桜のある道は変わらない。山桜は三十年経った今、随分太くなった。小松館から小松殿の墓を見て、谷津田から坂を登って寺に着いた。住職さんはお元気で境内の掃除をしておられた。

「あんたは夢を叶えて棟梁さんになったそうで、良く頑張ったね」

「ひなちゃん時代のあんたは、よく働いたね。あの頃のことを昨日のようだね」

茅屋根の本堂は一軒半の廊下を巡らし、木に囲まれた境内に堂々と建っている。ひなは帰り道一人で歩いていると涙が出て仕方がなかった。山桜の木を抱いて青春の日を思い、今ある幸せを大切にしていこうと木を見上げた。

平成の建立もまもなく祝いの日を迎えようとしている。三百年の時間とひなの愛で大きく育った山桜は、七年前、金のため、人の手であつけなく倒されてしまつて跡形もない。草も茂っていない。新しい山桜の芽が出てくることを願っていたい。

土橋町の大獅子

兼平智恵子

恒例の常陸國總社宮例大祭（九月の敬老の日を入れての三日間）に繰り広げられる各町内の様々な出し物についてご紹介しています。

明治三十五年八月に十六町内による新しい年番制度（現徳社宮の祭祀に関する記録は明治二十年からであり、府中四組交替の年番制度が始まりとされている）が生まれしました。この十六町内の内、十二町内は山車とその上にある人形でご紹介し、当会報先月号でご紹介しました木之地町のみろく、そして今回の土橋町の大獅子で、各町内の暖かいご協力のお蔭で、十四町目に入りました。

今回ご紹介します土橋町は木之地町に隣接する町内で、土橋通りまたは市民会館通りと言われている石岡市民会館までの左右に広がる、六十世帯余りの町内になっています。現在は府中二丁目となっています。地名は府中城（現在の石岡市民会館をも含む石岡小学校を中心として十四世紀頃に築造されたと言われている）の濠に架けられた「土橋」に由来すると言われています。

獅子舞はほぼ全国にわたって普及し、しかも民衆に愛着されている芸能でもあり、悪魔、悪霊を祓う強い呪力を有していると信じられています。「石岡のおまつり」には各町内から山車と人形の他、約三十の獅子が繰り出し華やかさと勇壮さと、石岡獅子にのっておかめ、ひよつとこ、きつねの踊りと盛大に行われます。約三十の獅子は幌獅子と言って全国でも珍しい、石岡のおまつり特有のもので車輪を付けた車体の上に小屋をつくり、布の幌（胴褌）をかけ、幌の色は通常二色で布の色で町内が分かるように各町内独自の色を使います。この先端に獅子頭を付け一人がかぶり持ち、舞いながら進みます。獅子頭は町内によって異なりますがおよそ幅五十〜六十センチ、重さ二十キロ前後と、ほとんどが大獅子です。小屋の中には獅子連が乗り、大太鼓、小太鼓、笛、

鉦で奏します。これらの獅子の中で土橋町の獅子と仲之内町の獅子が、以前当会報でご紹介しました富田町の三獅子「ささら」とともに露祓いの役目をもつ獅子です。

土橋町の獅子は全面に朱の漆が塗付され、眉は力強くねじれ、黒漆が塗られ、鼻は獅子鼻で穴が小さく、黒漆で鼻の部分が黒く塗られていて、金箔で塗られた歯は歯並びがよく全体的にみると均整がとれています。左右の眉や目の位置が若干異なり、静止の状態では温和さを表し、左右に振って踊った時には喜怒哀楽の表現を示し、霊鬼を折伏させる威力効果をあげているそうです。

獅子舞には一人で舞うものと、二人が一つの獅子頭の頭の中に入る舞があり、二人舞は「昇殿」の舞と言ひ、前方が右手に御幣を、左手に神楽鈴を持ち、後方が獅子頭を扱い二人呼吸合わせながら舞うものでこの昇殿の舞は神輿の露払いを務めている土橋町のみ保存、継承されている舞の一つであるそうです。土橋町の獅子頭の製作年代は町内に記録がなくはつきりわからないそうです。

しかし幕末末期まで継続して挙行されていた愛宕社の麦岩祭礼や八坂神社の祇園祭礼等の風流物に、嘉永七年（一八五四）「香丸組寅御用留」に「麦岩祭礼……土橋 大獅子（當年より定例）」

又、安政三年（一八五六）「香丸組辰御用留」に「麦岩祭礼……土橋町 獅子」が出されていたことが記されており、江戸後期には大獅子として繰り出されていたことになりました。

「常府石岡の歴史」より 伝承によれば土橋町の大獅子は、宝暦（一七五二〜一七六四）頃、町内で世話になっていた渡大工が照光寺本堂の板戸に描かれていた唐獅子をモデルに製作したもので、ある

程度作った段階で白木のまま舞ってもらい、その後三年間を費やして完成。町を去る時に、世話になった御礼として、置いて行ったものと伝えられている。

この伝承されていることから、常陸國總社宮では石岡のおまつりの獅子の発祥の地区とのお答えでした。

思い返せば、歴史案内をスタートして間もない頃に「石岡のおまつりはなぜ獅子なのか」の問いに答えられないままでした。嬉しいヒントを頂きました。

大変親身になって色々と資料を提供下さいました櫻井先生、これからのガイドに参考とさせていただきます。誠に有り難うございました。

参考資料 常陸國總社宮例大祭と獅子 土橋獅子舞保存会

常府石岡の歴史 石岡教育委員会

・一生懸命若みどり

智恵子

奄美大島の一人旅

小林幸枝

昨年八月のお盆休みの時、三泊四日の日程で奄美大島へ旅行に出かけてきた。

のんびり、ゆったりと寛ぎたいと出かけたのですが、大島に到着した途端、予想以上の猛暑に出迎えられてビックリでした。しかし、眩しい太陽と何処までも広がる青空を見て暑くても良いと納得させられたのです。

レンタカーを借りてホテルに直行。荷物を預け、奄美の友人に会いに行く。久しぶりの再会でおし

やべりに花が咲く。夕食には奄美の郷土料理、鶏飯をご馳走になる。

翌日は一人で車を走らせ、島内の観光に出かけた。友人に教えられた通り先ず、あやまる岬に出かけた。ここは奄美十景の一つで土盛海岸をはじめ奄美の海と海岸を一望できる絶景の場所であった。抜けるような青空と海を満喫。

土盛海岸は、ブルーとグリーングラデーショナルになった海に感動。白砂の海岸が広がり海には珊瑚礁が広がっている。この海岸に何日も寝転がっていたいと思った。

奄美は水の豊かな島である。次に出かけたのはフォレストポリス。ここではマテリアの滝を見る。マテリアとは美しい滝壺を意味する奄美弁がなまったといわれており、本当に美しい滝だった。奄美パークでは、奄美の生活文化の歴史が観られ、自然に調和して暮らす素晴らしさを教えて貰った。

奄美は小さな島ですが、三泊四日の旅では全部を見つづることが出来ない程、色々な観光スポットがあります。私は、南国が好きなので、奄美の島のような所で暮らせたらと、いつも思っています。

奄美大島は、素朴で自然を感謝し、いつも笑って過ごせる風土が感じられる、魅力的な島だと思っています。

永住する事は叶わないまでも、時間があつたら何時も出かけて行きたい、心む島だと思っています。

【風の談話室】

今年は春が遅れるのかなと思っていたら、何んと何んと猛スピードでやってきて過ぎて行ってしまった。例年、ゴールデンウィークが花見盛りだった弘前の桜も、連休には葉桜だという。何とも忙しい春であることが。

我が家の庭の躑躅も満開を迎えようとしている。ちよつと早いかなと思つて植えたトマトの苗にはもう花が咲き実をつけようとしている。実にビックリな春である。

今回は、久しぶりに読者の方から投稿を頂きました。創刊当時から読んでいた方ですが、五年ほど前から突然、統合失調症にかかり、現在もまだ辛い症状とたたかつておられます。

小生、石岡に越してきて間もなくの頃、スポーツメンタルトレーニングの原稿を依頼され書いたのですが、その時に小生のこれまでの体験をもとにメンタル強化と作文との関係についての小論文的なものをまとめた事があつた。

その後、ブルゴルファーを目指す青年をあずかり、メンタルトレーニングとしてスポーツ作文力強化の指導をし、取り敢えずはブルゴルファーとしての一歩を踏み出させてやる事が出来た。

この経験があつた事から、今回の投稿下さった方にもメンタルファネスには作文することがいいですよとお勧めしていたのですが、今回初めて投稿を頂けることになりました。

投稿下さった堀江さんには、文章に上手、下手の尺度はありませんので、自身の養生日記のようなものを書いてみてはどうですか、とお話しておりますので、時々のご投稿いただけることを期待

しています。

統合失調症は、症状の程度の差は大きいのですが100人に1人ぐらいの割合で発症しているとのデータが示すように身近な病といえます。

治療も現在では格段に進歩し、多くの方が社会復帰されています。

昨今つづ病に対する正しい認識が高まり、その辛さが理解されるようになってきましたが、これを機に少しでもこころの病に対する正しい認識が広まってくればと思つています。

《読者投稿》

上を向いて歩こう

堀江美穂

私は五年ほど前から統合失調症という病気を患い、現在もまだ病との付き合いが続いております。統合失調症の程度の範囲はかなり広く、現在では百人に一人の割合で発症しているといわれています。しかし、それ程の割合での発症にもかかわらず身近な人達、家族・友人・職場の人達からの理解が得られず、本人には大層辛い病気です。

私も夫やその家族からの理解が得られず、三人の子供を残して離婚する事になってしまいました。夫の理解もなく、同居していた夫の親や姉弟からも全くの理解を得ることが出来ず、駄目嫁のレッテルだけを張られ、負のスパイラルに陥ってしまったのでした。

そうなると所謂ドツボにはまるではありませんが、今迄出来ていた家事等一切できなくなり、食事をつくるのも何をつくつたらいいのか、また何

を買ったらしいのかも分からなくなってしまうたのでした。料理を始めても、料理の手順も全く分からなくなってしまうていったのでした。

理解を示さない、理解する気持ちもない姑、小姑達からは益々強く馬鹿嫁呼ばわりをされるようになり、そのことが恐怖となって何時も頭の中に罵り声が響き渡るようになってしまいました。そして、それが高じてくると「お前みたいなバカは死んでしまえ！」「役立たずなんかぶつ殺してやる！」と具体的な幻聴まで聞こえてくるようになってしまったのでした。

幻聴、幻覚、妄想は日増しにエスカレートしてきて、とうとう子供達の目の前で、ナイフを手に手を切ったり、首や胸を刺したりと自殺行為を起こしてしまつたのでした。

半年ほど入院しましたが、その後は実家での療養となり、子供の親権は夫の方に渡し離婚する事になりました。

無知という言い方をすればそれまでですが、こうした心の病ということに、夫や姑家族に理解や思いやりがあれば、これほど急激な落ち込みをしなくて済んだかもしれない、とも思います。

私も以前は保育士の仕事をして、大勢の子供達と明るい毎日を過ごした日々もあつたのですが、今の自分を思うと落ち込んできます。

病気のために車の運転免許証も返還してしまい、ああくあ、落ちるとこまで落ちたかという気分になつてしまいました。ある時、落ちるところまで落ちたらその下はないのだから、これからは登るしかないと思うことが出来たのでした。

今は、病院のデイケアから直ぐ近くの場所にアパートを借りて、一人暮らしを始めています。ま

だ料理もきちんと出来ないで、ヘルパーさんに来てもらつたり、困つたことは訪問看護の人に來て相談に乗つて貰つたりして自立を目指して頑張つています。上を向いて歩こうと夢を創りながら歩き出した所です。

一つの作品として書かれた文章というのは、それをどう解釈するのかというのは、受け手に任せられているものだといえます。

作品としての文章に対して、上手だとか下手だとか、またこんなことを書いたらどう思われるだろうか、ということをおもつたり考へたりするのは非常にナンセンスなことである。

打田兄の得意の一節ではないが、動物の中で言葉を文字に書いて表現できるのは人間だけ。文章を書くのが嫌だというのは人間篇と同じだ、を小生も声高く言いたい。

《一寸一言・もう一言》

温暖化の恐怖

菅原茂美

地球温暖化は、いかほどの害をなすのか？

豪雪地帯は、温暖化が進めば、除雪費や暖房費など、かなり助かるに違いない。北極航路が開設されたり、寒冷地でも温帯の農作物が栽培できる等、悪いことだけではないじゃないか……との話もある。しかし、局部的にはそうも言えるが、世界全体で見た時にはそうではない。温暖化が進み北極圏の氷が解けると、冬に、寒さを北極圏に閉じ

込めておけなくなり、中緯度地帯で逆に冬の寒さが厳しくなる。事実この冬の積雪は記録的であつた。勿論年々夏の猛暑は増すばかり。温暖化が進めば、低地の水没・干ばつや強烈な気候変動、絶滅危惧種が増える。エネルギー問題・防災対策など難題は山積するばかり。

そして何より怖いのは、マラリヤなど熱帯病が中緯度地帯にも蔓延し、ワクチンのない伝染病の防御が非常に難しくなる。最新情報であるが植物の感染症が動物にも感染したという話である。

オーストラリアのユーカリの木を枯らす真菌（クリプトコッカス・ガッテイ）が、カナダのベイマツに感染し、病原性を増し、なんと動物にも感染。バンクーバー島で、ネズミイルカや犬猫に肺炎を起こし、ついに人間にも感染。肺炎・脳炎を起こし、人間の死亡率25〜30%にも達した。

なぜこのような現象が起きたかという点、物流が全世界にまたがり、遠隔地の近縁種の微生物同士が交配すると、雑種強勢され、今までなかった病原性が強化されたものと思われる……とのこと。

国分寺の秘密

打田昇三

常陸国分寺には雄鐘と雌鐘があり、盗賊が雌鐘だけを盗んで舟で霞ヶ浦を渡ろうとした際に重さで転覆し鐘は沈んだ。とても引き上げられないから雌鐘は永久に湖底に放置されることになり「雄鐘、恋し」と鳴る……という伝説があると共に男国分寺の鐘の受難の歴史を象徴していると共に男女の機微を示唆しているような話である。雌鐘は永久に湖底だが、雄鐘のほうは何度も火

災に遭い、その度に鐘も焼けて最後には溶けて無くなる：冷たいか熱いかの違いで相思相愛の男女が共に不運に泣く：悲運の物語であるが良く考えたと、艶っぽい話が戒律の厳しい寺院に残るのは珍しい。

石岡には常陸国府が置かれていた。国府の所在地に国分寺を建立させたのは第四十五代の聖武天皇であるが、此の天皇は六歳の時に父親を失っており、祖母の元明天皇が「子供ではダメ」と言っていて中々、天皇にして貰えなかった。と、いうのは父親の文武天皇が病気で死ぬ前に、自分の母親に後を頼んだからである。是で皇位継承のルールがおかしくなった。

結局、文武天皇から祖母の元明天皇に話が行き、次に伯母（文武天皇の姉）が皇位を継いでから、やっと聖武天皇にバトンが回ってきたので、聖武天皇は成人式を遙かに過ぎて天皇になれたのである。その所為も有って聖武天皇が即位した頃からは日本に天皇制を導入して以来の熾烈な勢力争い（天智・天武両天皇系統の誰が天皇になっても不自然では無い対立）が見られた。長屋王事件、井上内親王事件、藤原仲麻呂事件など皇族が関わる事件により多くの人が消えていった。そうした中から苦勞して生き残っていったのが平家や石岡に所縁のある大掾氏の祖先とされる桓武天皇である。聖武天皇は、民間から皇后となった藤原光明子の影響もあったようで政治的な悩みや飢饉、反乱など国家的な不安に心が休まらず、次第に仏教にのめり込んでゆくのである。悪く言えば仏教に逃げ込んだ無責任な人物とも言える。それでも余り知られてはいないが「安積親王」という、皇后以外の女性に産ませた男子に将来を期待していたの

だが、この親王が不可解な死を遂げる。足を捻挫しただけで死んでしまったのである。幾ら昔でも捻挫が致命傷というのはコジツケも度が過ぎている。藤原氏が暗殺したのだと思う。この親王の死も聖武天皇が仏教に没入する切っ掛けを与えたのである。

かくして聖武天皇の十三年（七四一）三月十四日、諸国に国分寺設置の命令が天皇の詔として下された。地方にとっては迷惑な話である。寺院建立となれば莫大な資金が必要だからである。現代ならば簡単に消費税を上げれば済むが当時の庶民は碌な生活も出来ず消費など出来なかった。結局、長い年月を掛けて国分寺が出来たのだと思う。その為に地元でそこそこの暮らしをしていた人たちに皺寄せがいった。

当然のことながら庶民の不平不満が高まってきて、その懐柔策に国分寺などの寺院を一般の人にも開放することが行われた。良い具合に国分僧寺と国分尼寺が出来たから、男性は尼寺に行き、女性には僧寺に行けば良い。

弘化三年（八一二）の夏、嵯峨天皇（桓武天皇の子）が珍しい勅語を下している。「この頃、一般の男女が有難いお経を聞くと言って、やたらと寺院内に入り込み、説法が終わった後にも帰らずに、何やら怪しい行動をとっているという噂を耳にした。是は仏を崇めるように見えて実は仏法を汚す行為である。以後、一般の者は更衣室のように男子用と女子用を厳しく区分すべし！」

嵯峨天皇は皇后に壇林皇后と呼ばれた橘嘉智子を迎えたほか、文武天皇の曾孫である交野女王以下多くの女性から数え切れないほど子孫を残しているから、偉そうなことも言えないのだが、立場

上、聖人君子のような勅語を出した。

国分寺・国分尼寺でも此の勅語が守られたかどうかは分からないが、冒頭に述べた鐘の話は、勅語で「恋路の邪魔」をされた庶民の愚痴なのかも知れない。

《ことば座だより》

朗読のすすめ

白井啓治

ことば座を立ち上げる前に、「ふるさと風の会」の前進である「ふるさとルネサンス」の時に、ふるさと物語が創作されるようになってきたら、それを文庫本などに発表するだけではなく、舞台表現のような形態で発表をしていくことを考えたいと、朗読劇団「しゅわーど」を立ち上げて貰ったのであった。しかし、両方が頓挫し、ふるさと風の会と朗読舞劇団ことば座を立ち上げることとなったのであった。

各地にふる里劇団が存在するが、長く継続させることはなかなか難しく、解散はしていないけれども、休眠状態というのが多くの実態であろう。

その大きな要因が、どうしても大がかりな舞台を夢見てしまうからだといえる。さらに、劇団を確りと指導する人や脚本を書く人材がない事が挙げられる。脚本・演出で飯を喰ってきた者から見るとあまりにも無謀な夢を描いている、と言わざるを得ないことをやろうとしているのである。

何故、大掛かりな舞台を夢のように描くのかといえば、演劇に対する無知と言うことになるかとおもう。演劇とはこうやるものだと勝手にきめ

てかかっている所に大きな問題があるのだろう。

朗読は演劇です、という「エエッ!?」とびつくりされる方がいる。また朗読というのはラジオドラマの一つかのように勘違いされている方もいる。確かにラジオが普及しそこで朗読が放送されるようになったことからそんな風に勘違いされている方もいる。

一番の問題は、朗読の指導をする人の多くは、元アナウンサーという人が多いことであろう。彼等から発音が、イントネーションが、と教えられるものだから、朗読に本来必要な激しく演じるということがどこかに飛んで行ってしまったともいえる。朗読の演劇表現としての自由を奪ってしまったことが勘違いへの大きな要因であろう。

朗読の形式の中には一人で読むのではなく大勢の人が読む形式の朗読もある。また、手にした本を読むのではあるが、一人芝居のように、舞台を縦横に動き回り演技しながら朗読語りをしていくという朗読もある。

白石加代子の朗読劇百物語シリーズがよいよファイナル公演を迎える様であるが、彼女の朗読劇などを観ると、朗読とははまさしく演劇そのものと理解が届くだろうと思う。

いつ頃からだろうか。教育ママたちの間からなのかよく知らないが、「読み聞かせの会」などが広がり学校やホームなどに出かけて本を読み聞かせると、という活動が行われている。これも朗読という演劇表現の自在さを奪ったともいえる。脚本・演出家の立場から言えば、「読み聞かせ」とは自分の子供や孫に対して行うもので、他人を大勢集めた中でやってはいけないものである。何よりも「読み聞かせ」という言葉の立ち位置が良くない。小

生には卑猥な臭いしか臭って来ない。

これは前にも何度かこの会報に述べてきたが、演劇とは「劇(はげ)しく演ずる」ことをいいます。劇しくというのは、訴えるべき事を登場人物や言葉に借りて謂わば毒の如くに表現すること、と言えよう。

舞台というのは、登場する人物の多い少ないで表現のスケールが変わるといえるものではない。あくまでも迫力あるスケール感を生むのは俳優の力と演出力である。そういう意味では7月2日につくばカピオホールで行われる白石加代子のファイナル公演をご覧になられると、認識を新たにされることと思う。

さて、人材の少ない地方の町で、文化力の発信として演劇表現を目指すとするれば、何も大人数の舞台を志向する必要は全くない。むしろ逆に独り舞台や朗読劇を目指す方がよいだろう。特にローカル色を満載した言葉やイントネーションで、劇しく演ずることができたら他に真似のできない表現が出来上がるであろう。

今、地方が面白い、と小生思っている。小さい事は良い事だ、と大声で叫ぶ楽しさがある。人間らしさがある。表現の自由がある。小さいからこそ自由奔放で自在なる芸術表現がある。…と。

五月は十五日から十九日まで、小林幸枝と二人、札幌の表現集団から招かれて出かけてくる。小林幸枝の手話舞が、初めて他の地の表現集団の人達とコラボレーションする事になる。これも小さいからこそ実現の叶った出来事であろう。

【特別企画】

打田昇三の『私本・平家物語』

巻第一 (3-1)

・額打論のこと

・清水寺炎上のこと

・東宮立(とうぐうだて)のこと

額打論(がくうちろん)のこと

この段も平家とは直接の関わりが無い。言わば頂点に達した平家の没落が始まる出来事の序章のようなものであり、二条天皇の早逝に伴う幼帝の即位と、天皇の葬儀に際して無法を行う僧兵の話題である。しかし次の段では僧兵の乱暴狼藉に関連して平家打倒のデマが生じ、平清盛は慌てふためき、平家一門の武士たちも右往左往することになる。揺るぎ無い平家の前途にも少しずつ暗雲が立ち込めてくるのである。

第七十六代の近衛天皇は、鳥羽上皇の第八皇子で母親は美福門院こと藤原得子(とくし)である。名前が「とくし」だから運が良かった、とか言うことでは無く多分、美人で頭も良かったらしい。父親は権中納言なので皇后を出せる家柄では無いのだが、得子さんは皇后格を貰った。尤も鳥羽上皇には皇后が三人居たという。その中の一人は父親の白河上皇に反対されたので名前を変えて入内させたそうである。雛祭りの人形と違って「三人官女」も簡単には実現できない。保元の乱を起した崇徳天皇も、平清盛と対立した後白河天皇も共に鳥羽上皇の子で待賢門院こと藤原璋子を母とする。

この女性は大人に成るまで白河法皇に育てられており、その命令で鳥羽天皇に与えられたから、自分の子ながら第一子である当代の崇徳天皇に？を抱く鳥羽上皇は、最初から自分の手元に居た美福門院に近衛天皇が生まれたから大喜びである。三歳の時に此の坊やを即位させるため、崇徳天皇に退位を迫った。やがて崇徳天皇の不満が「保元の乱」になるのである。しかし近衛天皇は童謡から始まって「♪高校三年生」を歌えずに、眼病のため他界したのである。眼の病気でも死ぬことがあるらしい。替わって登場するのが「天皇の器に有らず」として全く候補に挙がっていない後白河天皇であり、鳥羽上皇の跡を継いで在位数年、後は長い院政を開始する。ご指導頂いたのは二条、六条、高倉、安徳、後鳥羽の各天皇である。

二条天皇は後白河天皇の第一皇子で、母親は大納言・藤原経実の娘とされる。経実は、かの藤原道長の曾孫に当る。この女性は二条天皇を生んで直ぐに亡くなったそうで、母親代わりになったのが近衛天皇を生んだ藤原得子であったから近衛天皇の後継としては二条天皇が妥当なことになる。父帝の後白河天皇は、養育費は呉れたと思うが母親を失った坊やの面倒を見なかつたのかどうか、二条天皇とは父子の仲が悪かつたようで、其の対立が平清盛に出世の糸口を与えたことにもなる。この天皇から「二代の后」を強要された藤原多子は近衛天皇の皇后であった。二条天皇の行動には幼児体験が影響したのであるろうか。

その二条天皇も「♪青春時代」を元気に歌いかけて病気になる、息子の六条天皇に譲位してから一か月で亡くなった。六条天皇は父親の記録を更新して、即位したのが二歳である。平家物語原本の始まりは

「さる程に永萬元年の春の頃より、主上（二条天皇御不豫の御事と聞こえさせ給ひしが」とある。永萬年間は一年しかない。春先に風邪でも拗（こじ）らせたのか夏になっても治らなかつた。それどころか肺炎を起こしたらしく、誰が見ても「これは治らない病気！」と判つたから譲位の話が出たのである。

譲られた順仁（のぶひと）親王は、皇位よりも離乳食が欲しい年齢である。第二皇子とされるが多分、他に男児が居なかつたのであろう。母親は大蔵大輔（事務次官）伊岐致遠（いきむねと）平家物語では伊岐兼盛の娘とされる。二条天皇の子に違いないのだが母親が藤原一族では無いから形式上、二条天皇の第二皇后である藤原育子の許で育てられた。名前が「育児」に関係するので良かったけれども、一説では育子さんが生んだ！とも言われていて母親が誰だか良く分からない。

当代の天皇が危篤状態であるから母親の素性を問題にしている場合では無く、大急ぎで「親王宣下」の手続きを済ませ、乳母に抱かれた俣で天皇として即位した。緊急事態であるから止むを得ないのだが何事も形式と先例しか頭に無い公家の中には二歳の天皇が不満で——と、言うより母親が藤原一族では無いことが不満で、昔の記録を調べ回した奴がいる。……それが言うには「日本で子供の天皇は第五十六代の清和天皇が九歳で文徳天皇から皇位を譲られた。此の時は古代中国で周の侯爵の且（たん）という皇族が幼少の成王に代わって政務を執つたことがあるとする例に準（なぞら）えて藤原良房公が清和天皇を補佐した。是が摂政の始まりである。そして鳥羽天皇は五歳、近衛天皇は三歳で天皇の位に就いた。それでさえも未だ（登位には）早いと人々が言つていたのに六条天皇は僅か二歳で即位された。此のよう

な事は先例が無い。未だ先帝が御存命なのだから、これは余りにも性急なことである」と……。

二条天皇の病状は回復の見込みが全く無かつたのであるからこれは止むを得ないが、六条天皇は二歳で即位して、七五三の御祝も碌にして貰えず平清盛の圧力により五歳で退位させられた。そのようなことならば公家どもがガタガタ言うことは無かつた。そして後白河上皇の意図も有つて八歳で即位したのが高倉天皇である。その事は「東宮立て」に書かれている。後白河上皇は桓武平氏高棟流の平滋子（平時子の妹）を寵愛したと伝えられる。高倉天皇の生母は此の女性である。

話が少し先行したけれども、後継の天皇が決まつたことで安心した二条天皇は、息子の即位式が行われた翌日の永萬元年（一一六五）七月二十八日に短い生涯を閉じた。平家物語は二十七日になっているが一日二日はどうでも良い。「御歳二十三薨（つぼ）める花の散れるが如し（原本）」である。宮中の者たちは涙にくれて天皇の逝去を悼んだ。其の夜のうちに御遺体は京都市北区に在つた香隆寺という真言宗の寺の東北に当る連台野の奥、船岡山香隆寺陵に葬られたと原本は伝える。余計なことだが天皇の墓所は古墳に始まり、大規模に作られた御陵に埋葬されていた。大きければ当然ながら莫大な経費が掛かる。

これを改善したのが平氏の祖先とされる桓武天皇である。大規模な陵は国民に負担が掛かるから陵墓を小さくするように……指導をしたと伝えられる。二条天皇も、その趣旨で葬られたのであろうか。この方法は幕末まで守られてきたが、明治維新で宮廷官僚どもが大陵墓を復活してしまつたようである。

さて、これからが本題の「額打論」になる訳なのだ、その騒動が起つたのが御葬送の時と原本に

書いてある。既に埋葬は済んでいたのであるから別な日に墓所で行われた告別式でのことなのか或いは真夜中に埋葬した時のことなのか不明であるが、其の時に延暦寺の僧兵と興福寺の僧兵とが場所柄もわきまえず騒ぎを起し、そして乱暴狼藉を働いたのである。そもそも「額打ち」というのは、天皇が亡くなられた場合には奈良と京都の僧兵たちが供奉をして墓所の周りに額を打つ（供花の替わりに寺の名前を書いた札を立てる？）習慣が有った。所詮は自分たちの寺の宣伝であるからどうでも良いことなのだ、その順番、作法が決まっていたのである。

これは間接的に寺院の格を主張するようなものであり、先ず聖武天皇の勅願により建立された東大寺が一番に額を打つ。次いで淡海公と藤原不比等の御願により山科から奈良に移された興福寺が二番を打ち、それに向き合うようにして比叡山延暦寺の額を打つ。さらに天武天皇の御願寺であり教大和尚（きょうだいかしろう）と智証大師（ちしやうだいし）が開祖・中興となる三井寺（園城寺）が打つという順序で此の行事が行われてきた。

ところが、どういう心算なのか此の時に山門の大衆、つまり比叡山延暦寺の僧兵たちが先例を無視して東大寺の次に額打ちを行った。興福寺を飛び越したのである。無法の世界である僧兵の間にも「下克上つまり弱肉強食」が始まったのであろうか、当然の結果として興福寺側が問題視して大騒ぎになった。興福寺域の西にある金堂の僧兵で観音坊と勢至坊と言う二人の荒法師（無法者では無く武勇を誇る僧）が居て、この日は観音坊が黒糸で編んだ腹巻（巻）に白木の柄（え）を付けた長刀を握りしめ、勢至坊は萌黄色（黄と青色の中間）の腹巻に黒塗り鞘の太刀を身に付けていたのだが此の二人は、僧兵たちが立ち騒いでいる

横をつつと走り抜け、問題の額が立てられた前に来ると物も言わずに延暦寺が立てた額を斬り落としたのである。二人は地に落ちた額を粉々に打ち割り（仏門に居る者の所業とも思われないが）さらに「嬉しや水、鳴るは瀧の水、日は照るとも絶えずと歌え…」と囃しながら、場所も考えずに愚劣な舞いを舞って味方の集団に消えて行った。

平家物語は此処で終わっているが、源平盛衰記によれば、二人の僧が興福寺の額を打ち割るのではなく、長刀に添えて延暦寺の額の上に掲げてから「我と思わん者は出て来い！」と叫んだけれども誰も出て来なかった…と記されている。天皇の葬儀に際しての出来事であるから喧嘩両成敗でどちらが悪いとも言えないけれども内容からすれば馬鹿の程度がA級かB級かの問題になる。

此の時に二人の僧が歌った「嬉しや水云々」の文句は、平安末期に後白河上皇が選した当時のはやり歌歌詞集である「梁塵秘抄（りやうじんひしやう）」に収録された延年舞の歌詞たそうであるから、どう考えても天皇の墓所で歌うべきものではない。仏教界が腐り切っていたのであり、此の事件は腐ったまま「清水寺炎上」に続く。

清水寺炎上（きよみずでらえんじやう）のこと

平家物語原本によつては「きよみずでら」を「せいすいじ」と音読みしているものもあるが、内容に変わりが無いので観光案内に従っておく。

事件の発端は「山門の大衆」こと比叡山延暦寺の僧兵が、天皇の墓所での行事に従来の格式を乱して額打ちを行い、それに対して奈良興福寺の僧兵がこ

うふくでは無く報復に延暦寺の額を打ち砕いてしまった：通常の成り行きだと今度は延暦寺の僧兵が何かを仕出かす順番ではあるが、特別な思案か策略でも有ったのか、延暦寺側は文句の一つも言わずにいたから、却って不気味である。

本来ならば当代の天皇が亡くなって、その厳肅な葬儀なのであるから、心の無い草や木までも悲しみに色を変えるぐらいのことがあるべきところ、知能指数の低い坊主どもが騒動を起した。その場に居合わせた人々は身分の有る者も庶民たちも驚き呆れて心の中では「馬鹿坊主！」と思ったのであるが、声に出して言ったら命が無い。誰もが関わり合いになることを避けるように一人、二人と、その場を去って行ってしまった。

ところが、七月二十九日（又は八月九日）の昼ごろに「山門の大衆が群衆になって都に来る」という噂が広がった。昼飯を食いに来る訳では無くて何か魂胆が有ってやって来るらしい。考えられることは二条天皇の葬儀に際して受けた屈辱を晴らしに来るのである。これもフザケタ話で、坊主同志の争いを第三者に向ける：当時の仏教が地獄に落ちている証拠である。政府つまり平氏政権も黙っては居られないから武士団を出动させ、検非違使（けびいし）司法警察、衛門府の兼帯かこを派遣して入京を阻止させることにした。

比叡山から京都に入ってくるには、現在のケーブルカー路線の南側を西進するようにして左京区に至り南下して来れば良いのだが、賀茂川東部の六波羅には平家の本拠があり、さらに都の中心地には皇居（内裏）がある。守備軍は府内に敵を入れては一大事であるから郊外で防衛することになり召集された軍団は先手を打つつもりで比叡山麓の西坂本まで出張

して行った。現在は京都市の左京区になつてゐるよ
うなので僧兵の本拠地である比叡山延暦寺の寺域を
侵したことはない。

其処まで氣を使つて防御陣を布いたのだが延暦寺
の僧兵は流石に無駄飯を食つていただけ強くて出動
した軍勢は簡単に敗れてしまつた。政府軍は恥をか
いたことになる。此の時に誰が言い出したのか……
実は後白河上皇が比叡山の僧兵に命じて平家を追討
されるのであろう……というデマが流れた。これは
只ごとでは無い。当然の行動として武士たちは非番
でも大内裏（皇居）に集まり諸門の警護に当たつたの
であるが、平家に所縁の有る者は先ず六波羅に駆け
付けてしまつた。これが勘違いでは済まされない大
失態である。

此の時に平清盛は大納言の地位にあつたけれど
大納言（小豆）どころか大豆を撒き散らしたように慌
てて大騒ぎをした。後白河上皇が僧兵を把握される
ことを恐れたのである。主の清盛がそう言う状態
であつたから、皇室に寄生するように急成長して来た
平家の武士は、任務を放棄して平家屋敷の守備に走
るといふ醜態を演じてしまつたのである。その数、
数千と言われる。

そうした中で、平重盛はいち早く失態に気付いた
から「平家追討の噂は流言であろう……」として後白
河上皇の御所に向かい、お見舞いを兼ねて平家に謀
反のことなど無いことを言上した。上皇の方でも、
本心はどうでも流言には全く関与しないことを言い
訳しようと平家屋敷に赴かれた。しかし清盛は上皇
に疑心を抱き、病氣と称して会わなかつた。このこ
とが「平家の横暴な振舞い」として取られたのは
当然であり、後白河上皇の近臣たちが密かに「平家
が天罰を受ける」と感じた。

平家物語原文に依つては平重盛の庇護のもとに上
皇が何日か平家屋敷に留まつていたようである。

結局、平家追討はデマに過ぎなかつたけれども平
清盛の疑心暗鬼が後に平家滅亡に繋がることになつ
たのは皮肉なのか自業自得なのか……此の時に誰かが
上手く扇動して、本当に僧兵の軍団を六波羅に向け
ていけば平家は簡単に潰れていた。しかし僧兵の狙
いと言うか目的は「額打ち」の仕返しであるから本
来は奈良へ行かなくてはならない。

原本には「すぞろなる」或いは「そぞろなる」と
書いてあり、これは見当違いと言う意味らしいが、
奈良は敵の本拠地であるから、計算高く是を避けて
京都観光の目玉である清水寺へ押し寄せた。

昔のことで観光客は居なかつたから、比叡山の暴
徒たちは手当たり次第に火を付けて清水寺を焼き払
つたのである。清水寺にも僧兵は居たらしいが敵が
多すぎて防げない。自衛消防団も命からがら逃げ出
した。逃げながらも「何で此の寺が焼かれるのか？」
考えて思い付くことは祇園社こと八坂神社と仲が悪
かつた。祇園社は比叡山に服属しており、清水寺は
奈良の興福寺を本山にしていたからだと思つた。

しかし押し寄せた暴徒たちは「これは二条天皇の葬
儀に際し興福寺側に侮辱されたことに」
を雪ぐ（かいけいのはじをそそぐ）「ため」だと、理屈に
ならない主張をした。会稽の恥とは中国の故事で、
合戦に負けた雪辱を果たすことであるから筋違いも
甚だしい。僧兵たちの喧嘩に使う言葉では無い。

清水寺が焼かれた翌日、焼け跡に「観音火坑変成
池は如何に（かんのんかこうへんじょうちはいかに）法華経に
よれば、観世音の功德により猛火も水に変える。管などの清水
寺は焼けてしまつたではないか」と皮肉な札が立てられ
た。その次の日には「歴劫不思議、力及ばず（りやく

ごうふしぎちからおよばず）観音の御利生（御加護）は深いもの
であるから、今回は焼かれてしまつたけれども必ず救つて下さる
と信じている」と、返しの文が掲示された。焼いたほ
うも焼かれたほうも、学の有るところを見せようと
したのであろうが愚挙を笑われるだけである。其の
中に焼け跡を占領していた比叡山の僧兵たちも引き
上げたので後白河上皇は平家館から帰還された。本
来ならば当主の清盛がお供すべきなのだが重盛が随
行しただけで清盛はサボつた。是は清盛が上皇を警
戒した為だと心ある人々は噂をしていた。

重盛が帰つて来てから清盛は「上皇が当館に來ら
れたことこそ、尤も用心しなければならぬ。（様子
を見に来たのではないか？）僧兵が平家館を攻めるなどと
言う噂は上皇が普段から口に出しているからこそ発
生した噂なのであろう。そなたも上皇には余り近づ
かない方がよい」と言つた。

これに対して重盛は「そのような事は態度にもお
言葉にも出してはいけません。（言動には十分に注意して
ください）人の注目を引くようなことは誤解を招く元
になります。朝廷の意向に背くようなことをせず、
人に情を施すような行動をしていけば必ず神仏の御
加護が有る筈です。何も恐れることも無くなるでし
よう」と答えて座を立つた。清盛は照れ臭そうに側
近の者に「我が子ながら重盛は大人物になつてきた
な！」と漏らした。

息子の重盛は大人物になつても、親父さんの平清
盛のほうは野心が大きくなるばかりで人間的には進
歩が止まつたらしく、権力の頂点を目指すラストス
パートにかかつていた。僧兵乱入の翌年には事件で
慌てたことも忘れて、先に述べたように妻（時子）の
甥である憲仁親王を皇太子とすることに成功し、自
分が大納言のまま東宮大夫（皇太子のことを扱う役所の長

宣となつて、次代の朝廷を抑える布石を打っていたのである。

一方で、平家屋敷から戻られた後白河上皇は、僧兵の首都乱入に際して「後白河上皇が平家追討を命じられた」とする噂が流れたことを気にされて「誰が流したのか不思議なことがある？」と側近たちに漏らされた。「私はそのような野心など露ほども持つて居ないのに……」と上皇が言われると、側近で切れ者と評判の高い西光法師が近くに居て「天に口なしで何も言われなければ天の御意思は、人間によって言わせる——と申す。近頃の平家は、身分を弁（わきま）えずに勝手なことばかりをしている。その為に天（神）のお計らいで庶民の口を借りて追討の噂が流れたのでしょうか……」と堂々と言い放った。これを聞いた公家たちは一様に顔を見合せて「此の事は御内聞に（他言無用）、壁に耳あり、と申す。洩れたら只では済みません……恐ろしいこと」と言い合つた。この後の「東宮立」は原本により「清水寺炎上」に含まれていたり、次の「殿下乗合」に入つたりしている。話の概要は憲仁親王が皇太子になったことにより平家の中でも生母（建春門院）の兄・平時忠が権盛を誇る……というもので、山で言うところの辺りが平家の絶頂期になる。しかし、平家物語の冒頭にあるように「奢（おご）れる人も久しからず……」であり、次の「殿下乗合」からは平家に対する反感が目立つようになって、先ず、後白河上皇の心が平家から離れてゆくのである。

東宮立（とうきゅうだて）のこと

此の極めて短かい章段は、内容的には前段の馬鹿

坊主たちの暴挙やら後段の「殿下乗合」とは直接の関係が無い。短い為に前後の章段に吸収され易いのであるうけれども、平家が栄耀栄華の絶頂に登り詰めて、後は下降に向かう話であるから独立して書いて貰いたいと思う。先に触れたように、清盛夫人の妹が生んだ皇子が高倉天皇として登場するのであるから、漫才の科白（せりふ）では無いが平家一門は此処で威張らないと、威張る場面が段々と少なくなるのである。

主題の「東宮」は「春宮」とも書き、皇太子のことである。本来は皇太子の居る場所が御所の東に在つて「東宮」と呼ばれたらしい。皇太子の制度そのものが中国から伝わつたので、昔の人が何とか日本らしさを残そうと「東」春」としたのかも知れない。学者に依つては「東宮＝皇太子の居所」「春宮＝皇太子」と区分している。言葉としての本来は、皇太子が「東（春）宮」で、皇太子の居所が「東（春）宮坊」なのであろう。この制度及び呼び名などは中国で行われていたらしい。

東宮坊にも、太政官とまではいかないにしても大勢の役人が居て事務を取り扱つていた。平家物語の本題からは逸れるけれども、参考として東宮坊の役人の概略を紹介しておく。なお、これは飽く迄も平安時代から平清盛時代のことである。

東宮坊の長は太政大臣又は左右の大臣が兼ねる「傳（つと）指導係」で、その下に二人の「学士」侍講が居り、そして事務上の長官である「大夫（だいち）」が二人付いたらしいから皇太子も喧（やかま）しい爺らに囲まれて大変だつたらう。その下部に「亮（すけ）」「大進」「少進」「大属（だいかん）」「少属」などが居り、使い走りは「使部」である。「少属」でも従八位の官位を有していて国府役人だと「掾」の

下の「目（もく）」に相当する官僚である。それらの職員が「舎人（とねり）」「主膳（かしわで）」「主蔵（くらつかき）」などなどの部署に勤務していて、何をしていたのかは知らないが、舎人だけでも六百人以上も居た記録がある。呆（あき）れるような膨大な組織である。

さて「額打論」から「清水寺炎上」にかけて凶暴化した僧侶の集団が活躍？し、急成長を遂げつづつあつた平家にも脅威を及ぼした。事の発端は二条天皇の夭折である。新たに即位した六条天皇は乳母車の中ではあるが喪に服していたから、誰が決めたのか宮中でのしきたりに従つた年末年始の諸行事も行われずにいた。新帝が即位した際に行われる昔の新嘗祭（にいなめさい＝天皇が新米を食べる）に相当する大嘗会（だいじょうそ）とか、大嘗会に先立つて賀茂川の岸で行う禊（みそぎ）の儀式とかが、それである。秋も深まってから寒い河原で行われる行事であるから、喪中でなくても幼児には無理！中止になつて良かった。暮れも押し詰まつた十二月二十四日には後白河上皇の側室で「東の御方」と申された女性が生んだ第三皇子（一説では第七皇子）に「親王」の宣旨が下された。そうした中で翌年は永萬二年が改元で仁安元年となり、十月八日には、去年に親王の宣旨を受けた憲仁（のりひと）親王が東三条の御所で東宮に立たれた。この方は「額打論」の中でも述べたように平清盛夫人（時子）の妹（滋子＝東の御方）を母としている。東の御方は皇子の誕生に依つて「建春門院」と称される。

ところで、皇太子の憲仁親王は六歳になるが、六条天皇が三歳であり、然も皇太子が血筋では天皇の伯父さんに当るから、此の人事は長幼の序に反することになる。原本では「詔目（しよもく）に合ひ叶わ

す：」と書いているが、これは古代中国で天子が先祖の靈廟で祭祀を行う場合の長幼の順序を述べているとか：既に朝廷内で決めたことであるから平家物語の作者がとやかく言っても仕方が無いのである。それに反省したのかどうか、原本には寛和二年（九八〇）に一条天皇が七歳で即位され、皇太子には十一歳の居貞（おきさだ）親王（後の三条天皇）が立てられた例があるから先例が無かった訳ではない：と言いつつしている。

一条天皇時代は藤原道長が朝廷を操っていて冷泉天皇系と円融天皇系双方から天皇を出し、自分の娘を中宮にしていたから「年の差即位」も計画的だった：それはともかく二歳で即位された六条天皇は、五歳になった時に早くも次の天皇に皇位を譲らされて「新院」と呼ばれることになった。これは天皇の尊厳を無視したひど過ぎる扱いで、此処は坊やでも怒る場面であるが、お菓子でも与えられて騙されたのであろうか：オカシイ？

「院」とは皇位を譲って隠居された上皇又は法皇に対する敬称であるが、通常の状態では天皇が頻りに替わることは無いから当代の先帝すなわち「院」は一人なのだが、此の場合は後白河上皇が「院」として現役で頑張っているのに、平家の都合で六条天皇がサツサと院にさせられてしまったのである。そこで「二人の院」を区別する為に、元服前と言うか小学校入学以前の「太上天皇」上皇である六条坊やが「新人並の上皇」と言うことで「新院」なのである。お気の毒ついでに触れておくと、この若過ぎる上皇は中学校へ入るか入らないかの年齢で死去されている。

原本では皮肉たつぷりに「元服前の太上天皇と言うのは漢の国の故事でも日本の歴史でも初めてのことで

である」と書いている。初めてで有ろうと最後であろうと、誰も文句は言えない。仁安三年（一一六八）三月二十日には、新帝（高倉天皇）が目出度く大極殿で即位された。平家物語には書いて無いのだが、一週間前に京都では六角から朱雀まで大火災があり三千戸余りが焼失している。

それでも儀式は盛大に行われた。現代だから言えるが、当時の人たちは焼け跡に立ちつくしながら「国民を無視した儀式である」と思った。

火事のこととは忘れて頂いて此の天皇が即位されたことは、いよいよ平家の栄華が頂点に達したように見える。高倉天皇の生母は建春門院であり、先に述べたように此の女性は平家の一門である上に入道相国（平清盛）出家したので入道、「相国」は太政大臣の中国名の北の方（正室）で二位殿と呼ばれた平時子（高棟流桓武平氏）の妹である。

また大納言の職にある平時忠卿は建春門院の兄であるから天皇の母方親族になる。宮中内外で権勢を誇るのは当然のこと、威張りまくっていた。大臣などの任命から叙位叙勲の人選まで、天皇の行うことは、この安っぽい男が思いのままに取り仕切っていたから平時忠の名声と繁栄ぶり、世間の人望などは目出度い限りであった。これは「遣唐使」で知られた中国「唐」の第六代皇帝「玄宗」（在位七一二〜七五六）が、息子（理王・ほうおう）の妃である楊貴妃に迷い、楊貴妃の一族であった楊国忠が権力を振るつたのと同じである。

また高倉天皇は小学校へ行かなくてはならないから、政務は太政大臣の平清盛が見るようになり天下のことは清盛の決定でなされた。これも平家物語では無視していることであるが実は、重大な誤りであって、本来の太政大臣は大寶令で決められた最高の

官（表現は悪いが天皇の顧問の様な地位）なので決められた職務は無く通常は皇太子が任命された。臣下では名譽として藤原鎌足も藤原不比等も死後に任官（贈位）されている。恵美押勝や弓削道鏡がなったのは例外であり、孝謙天皇が思い付きで其の地位を与えたに過ぎない。平安時代には藤原氏が何人か任命されただけである。

一方で「関白」というのは、百官（すべての官僚）を統括して政治を行う任務がある。天皇が幼い場合には「摂政」が補佐し、成人されてからは関白が天皇の政務を助ける。藤原道長のように摂政関白は「一人の人（いちのひと）」と呼ばれて太政大臣よりも上席に着いた。平清盛は太政大臣でしかないのに、政務を見ざるほど見たから（自分の都合の良いようにはあったが）関白の職に就いたようなことになる。そこで世間の人は最大の皮肉を込めて「平関白」と呼んだのである。（当時の世間の人は清盛より知識があった？）

《ふじ》

アレンジ蕎麦・蕎麦会席料理のお店です。

（ギター文化館通り）

看板娘（犬）「うひゃ」ちゃんが

皆さんをお迎えいたします。

電話0299-24-2063

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

（白井啓治方）

<http://www.furusato-kaze.com/>

ギター文化館発「常世の国の恋物語百」

ことば座第27回定期公演

2014年6月14日、15日（14時30分開場、15時開演）

入場料2000円（小中学生1000円）

第一部 常世の国の恋物語第34話

「風に舞う古歌は恋詩（万葉集・古今集）」

朗読：白井啓治 手話舞：小林幸枝

第二部 つむぎびと（札幌の表現集団）特別友情公演

朗読劇「かがい舟」＝だれかあの火をみたか＝

朗読：熊谷敬子 手話舞：小林幸枝 ギター：亀岡三典

（15日茨城出身のフルート奏者 池田さくこさん、友情出演予定）

ことば座 茨城県石岡市府中5-1-35 ☎0299-24-2063 Fax0299-23-0150

ふるさと「風の会」8周年歩み展

&

風のことば絵教室展

2014年6月14日・15日：10時～14時30分（入場無料）

ふるさとルネサンス講座の受講生4人と講師が中心となって、会報を発行し始めて8周年となります。兄妹であることば座の定期公演前に、8周年の歩み展を開催いたします。会員の書きためた小文を集めた文庫をはじめ、風の会の分科会として兼平智恵子の開いている「風のことば絵」教室の作品を展示いたします。

（ふるさと風の会展のお問い合わせは、打田昇三 0299-22-4400 兼平智恵子 0299-46-2457 まで）